



二

佐座礼伊志

ル 4
1149
2





凡 4
1149
2

細石

辛酉義紹扣
三

當時無之慶長以前

城館搔上若小屋郷士等居住屋鋪地之事

木内郡

木曾殿隠

鬼ヶ里の奥五合村の中にあがり治承辛申朝日將軍
木曾義仲敵陣のたもとを巖石とくわゆる休息せし
とて今尚存あり

熊坂

承永二年癸卯のころ隆念の頼朝と木曾の義仲と
和のりありて義仲少吹の博を並せしに隆念と和す
頼朝と隆念の和す

冠者海野上太郎者隆倉小ころ

中御所

永享二年癸卯年建久二年壬子のころ
北軍頼朝云々
四ノ河原向の村を乞ふ事も亦静かき所
此は美濃守の所
の所名も少ありし所也
中御所
同所
の所

柏丸 虫倉山

葛城瓦屋村の虫倉の古山の上あり
今虫倉の古山也
少く文和延文の頃下細田村に居候

目下福氏の譜代の家臣大久保理房の所
今虫倉村あり
西の所に入り家系等ありしと云ぬ
城由ありしと云ぬ

布留山 古山

今の古山村古城の跡あり
戸田氏於て居候
貞治應永のころ
曰二説小三
氏とあり
家系等あり

風間

村中勢少輔源満信の幕下
風間文内が補居候
應永七年庚辰の九月大塔合戦に討死

布野

井上元重の源光頼の長子
布留山
由緒不明
後小布野氏改
めし居候
應永七年庚辰九月大塔合戦に御
討死
布野
源光頼の長子
布留山
由緒不明
後小布野氏改
めし居候
應永七年庚辰九月大塔合戦に御
討死

宇木

小笠原信濃守源長房の長子
宇木少左衛門居候
應永七年
庚辰のころ
十月に討死
大塔合戦に討死
宇木
源長房の長子
宇木少左衛門居候
應永七年
庚辰のころ
十月に討死
大塔合戦に討死

室井

坂人の後武田家に降一天文十年辛丑のうへ一甲別に行
住居一為棟被滅

深澤

小市山の上に古城の迹あり村々家の持保六ヶ所の内二城
りし棟之石をとり家長交代しつゝこれと守割を天文
十三年丁未のうへ一八月村をたすの尉為清武田家のため
當土退去の後荒廢

千田

村中惣少補源信の幕下千田頼通が住居百廿ヶ所
のゆゑに居城と云ふ七年唐原の月大塔合戦に討死す
後代々方々に居城一天文十三年丁未の八月廿四日葛尾
の城主村上義清と南条合戦あり南条が退去し頼通のま

春日の城主と夜家へ逃去のまゝ千田中惣大補あり家長
一同被討つるまゝに居城被破せしむ

因曰千田氏の子孫のうへに家長といへる今遺跡
を後してあり

憲寺

今の久保寺北山に城あり應永年中大塔合戦し
大文字二塔の軍勢あり危候仔細の棟あり中興村
上の屬城といふ家長憲寺大寺在り天文十三年丁未乃
り八月廿四日村をたすの尉為清の跡あり荒廢

本取山

平家村の南今移御のうへに新入道源信天文十三年丁未
の八月村をたすの尉為清の跡あり川中寄ありて
武田信玄と合戦の名の跡あり

三日城

東取山あつた百石村の地あり上杉謙信川中流合戦
のときなほ正徳中流言法成就のち能ふ若と築石城
ありぬ三日城と云ふ

小川

鬼倉里村より二里余南のちのふ小今古保の地あり城
之小川た馬の自願代り居城の地天文年中位別守後職
之位中納頭國の下知たつた我とと意之信一牧の地
城之番坂安房守細細守の橋子小笠原自願の西男長利
合見長棟と云ふ知りあり深志の傳と云ふあり小日向
小笠原長忠と改居一牧のちふあり村之家小藤と云
文和年中申のち村之義清のち知りて小笠原長忠

命りたつ自願世致ありむ某小川の二跡番城氏を
頼領一橋子長忠小日向深志と改め高橋一橋居
と云ふあり小日向氏と小川殿と称し治弘元年己丑年
八月壬申神の幣上野系に於て上杉武田の自願討原
の御甲別言り士将高橋と責りありと云ふ一深志
防系と討死と云ふあり討絶

尾張部

村之刑部大輔の長尾治部守一村南と云ふ所あり
館右と云ふ海のちの武田家少将ありと云ふあり

押渡

押金及初居元某村之家の長あり永源の年村と
義清の後と恐れ甲別ありと云ふ武田家所南流河松

家長宮下修理后任中一む、永祿四年辛酉の六月武
田家のために扇塚

割箇嶽

野ノ舞

野尻湖の東方のふか野を掃くといふ村と義徳の長
長重臣被前よりその子龍と上杉家より如野より
新海又と平野田兵衛過る平兵衛千余人跡を宇田
上徳須田存りつるといふと成守り兵永祿四年辛酉の
上杉謙信上洛の途を飛鶴と遠くは信玄おろの命より
長長如野河守妙湖とよくといふといふ太子といふ
流路と掃くといふ浦田兵衛といふ一両の兵つる陣中といふ
小岩圖書といふ大木大石と投あけおろの流は石原流
守号河子と家といふともいふといふといふといふ陣中といふ

防軍討死を武田将軍とあけに城郭と杉原

若月

源之臣の裔若槻伊豆守源長隆永享七年庚辰の
うし掃た能より陣屋扇塚の後其子若槻伊豆守と
ともいふ當ふにあり、牧里田八幡の喜ぶに右傳人永祿四
年辛酉のうしといふ武田信玄信利は信玄のうしといふ
ともいふといふといふ上杉家の約と遠割を扇塚扇塚より
威治少将といふ傳と致主たといふといふ被後玉古里村
おありといふ後城代新設

野尻

當城といふ杉家の掃くといふといふ長馬武智磨
の十六代宇佐原之命といふ扇塚扇塚の東胤流河守といふ

曰正安桶三十八の孫宇佐原清のち定河の右様 曰定河ハ奇也天
化身より産り

白誓しりて春小羅申
あり上杉隆信稱て宇佐神氏ト呼 永祿七年甲子のち **被清王**

信初上田左衛門の城を長尾越前守為景と義景の管

領御虎入右衛門の一族を妹督ありたりと義景謀

叛の企ありしを老臣宇佐神清の守命一保せし

めしを破れはひりおむとて謀云ふありしを

美河あり定河も主命懸けありて昔より信守し

謀略ありて慶長島の御ふはあ七月の夜に捕りし

義景と同様に御守役ありて移りしは義景より

新屋を破り定河も主命懸けありて義景を捕りし

のちもとありけり相伴ふ御屋小幡九八義景討つ

たりありて改景の二男景勝とて孫信家督と

宇佐原定河の長男氏於是勝二常治市勝のちに在

海へして南博下信ありて故下博代破却せしむ

大倉

當博一人皇五子一氏清和天皇まゝの皇子子身氏親王

の七世新羅三平義光のち氏小笠原信濃守源長清

のち二男小笠原右衛門長澄美久平中一とゆありて

一と大倉氏と稱し弓術の名人と名代に任在りし

合戦の次は上杉家小幡一安堵の田ひりし居

せしむる天守中平壬午のち二月武田家滅

の後四月十下織田信長云のち知りて北信濃四郡

精武藏守原長一と名ひ海防の城と稱せしと

因曰源中下流此の噂船の噂ありて後此の噂
船ありし船の噂に船屋に義景と云ふ一船今現ありて見
りしとて

時近郷一掃地新し長江長少廟く森長一万余兵と
率一万余人と討たて後一掃大会の博少川龍を小
修く南郷一掃向一博を攻る一賊首芋川刑部と
比大会と市浅井を討つ路東と討つ森長一賊田
伝忠に討たせ時大会を博少川

因曰大会の城は山崎より今の村より西の方向に今白山新田と云
所佐吉の博はまむむの城は新田より近き白山路より

芋川

上秋の幕下芋川刑部居天正十年壬午のより大会を
博の時長江表偏さ四月二十日森武を長一の事を
深せしむ

花嚴峯

浅井村の西の山の方小笠原より上秋の幕下浅井を討

居天正十年壬午のより大会を博の村四月二十日
武長守少れと深せ

平林

初村上の長平林日あて逐當おと領一居敵と云
居信之天文十年丁未のより八月二十日村を清
葛尾居博のより甲利家押寄信玄の命に信
系居信守信後絶たし南博と築武田家乃
持城を後京信後入道清忠小堀の居信守居博
天正十年壬午のより天目山戦は武田家滅亡の時
系氏家系絶たし同日南博破却せむ

和田

宮下

とらめ村と領文下所居居後中絶せしり中絶の時

原原庄ち平林の傳之と御南河と西之の城と
家長之交代してこれと高尾と下之城と
つて天正十年壬午より御南河と御荒原

堰

元東村より幕下高尾城之原合傳中ちの持城水
源四年辛卯のより高尾城の後武田領幕下
原原庄守り流又死傳代小田切主水正任天正十年
壬午のより淺田家のより高尾城

笹平

村と家の幕下春日原理太より居城又十六丁来の
より八月より上原合我少おる村と高尾とより
祇司より河の水源七年申子の七月和隆の御

御より河より南ふより村とに仕る其子其の河守
代天正十年壬午のより豊原家頭代の付御部

永井

上原の幕下永井源四郎居天正十年壬午のより
宰相景勝の命より御し飯山常盤の城より有放て
天正十年壬午のより城代職并知り永井村乃
居飯山に候され家系御絶

朝日山 小柴見

村との幕下小柴見宮内お補代居傳傳へ小柴見
の城より子息御口石近美又十六丁八月村と
清くもに御南河より父八原原より武田に降
君長之礼とありてより上原の家長其禰近は守

小月ありし武田家より寵命あり任置し所
より時をせめてふた新系流名あり命り
成りて白人牙果をいそ宗馬末と稱し
高きしや月より居る事長上流河
流八新系氏廢業ありて奉國光の太刀赤少保見の
一乃朝日ぶの城と稱しおれたに在る天正四年壬午の
武田没落し時上杉景勝苗城と押領して家長
高合居る事長流ありてありの文禄四年乙未乃
九月上杉軍相合付國留ありて當城を以掃
彼却せしむ

金箱

永名年中の次任州古松奉の城となりし國大

和弓の遠強常平の後より國強ありて
赤右衛門廣長のより有故嗣子あり家系新流氏

曰この古松奉よふ郡ありて一説よふ郡古松と流
之川村ありてありて是とありてとも今たあり

南郷

南郷氏於とよ家系ありてつとありて川中為合我
の後元龜のよりめ以南郷ありて任在
當所と稱し文記にもありて任在
是氏納降のより苗所と退去するむ
以上 木内郡 二十九所

- 常陸新治軍の暮の入の陳と銘の 上野
- 楠川 柘原 椿谷 竹生
- 瀨川 西の京 東の京 上野

吉村

平出

古間

柏原

古海

普光寺

倉井

蟹澤

今井

替佐

上倉

奈良澤

小佐原

南條

中條

北條

今井

顔戸

中曾根

小境

葉

本曾小笠原村と大倉上秋家の諸士が互に長の屋敷あり
 されども主家の家代ありて右郷士と稱すトとも互に
 軍印もあつて領地の子にともども所をされし程と異
 尚又今井が小八満長者更科が小居向長者小縣が小笠
 長者等の屋敷ありて右のやまの代官の屋敷あり
 あり諸所の信長より軍印ありて家系つとむる事あり
 准して是と書ふべし

高井郡

野部

往古に郷部領の氏相系莊元大初に豊守が所より
 町とく永且貫文の地と支那に右治承年中從之信忠
 公平和盛大に軍するに島國祭向の時一百兵と
 下平家の時出音とありと云ふ

小曾産

今のらむ村の東凡二里余の地原あり今永二年
 のりし本曾の冠者頼仲源平流磨門合戦の時
 由陳流と云ふ

因曰く後紫雲山靈成寺に小曾同宗の寺あり隆會の氏
 傳三百貫文と所に諸坊舎ありて永治の氏破廟
 ありてその名に後代に傳へる事ありて諸氏
 といはれ居る事あり

荒井

荒井右見守の右体親と云ふ二年辛卯の事一書汲少彦
高梨薩摩守の屬一南浦と砂部一と日野城守
家長少判一子孫を傳へて高梨を所城の以荒井幸八と
初行百石と願一家長職とつとむ

高遠

高遠刑部少輔の右体親と云ふ二年辛卯の事一書汲
少彦一高梨薩摩守の屬一當城と砂部一と日野
城守一少判一家長少判一子孫を傳へて高梨を所城と
高遠刑部と云一初行百石と願一家長職と部

江部

高梨薩摩守の右の幕下江部山城守右体親と云ふ二年

唐暦九月大塔合戦小討死す

上條

高梨薩摩守の右体親友尊の次男女四郎南新小
介此一源右衛門傳へて家長と稱一高梨七年唐暦の
一合身梅原信常と云ふ大塔合戦の初九月廿四日
坂西信常長廻のたふた横田の陣とありて立派十余人
討死されおろして南条新傳

本馬

高梨信常の右体親の孫高梨二年辛卯の事一書汲少彦
の右体親と云ふと云ふ高梨の初行一源右衛門傳へて
高梨少輔と云ふ高梨七年唐暦の事一高梨と云
文字二橋下大塔合戦の初高梨の子とありて有也

三杯の原よあつし 飯田尾馬弁のたふたけ大

吉田

吉田家の幕下吉田典膳所より作し、馬場の後
長波よりつて日蓮寺よりつて當ふと御守り一家は
小列一のふと御守り吉田氏曰北の御守りつて代々
吉田典膳と名一家を職とつてむ

真山

當城のえ末の當城の城山よりつてと源平流磨川
合戦の落村に直つてつてつて城と築本曾の長崎同山
千石寺に在る村と名一天文十年中三利本曾御守り領
地と名つて天文十年辛丑年迄領

川田

村と家の長川川田村よりつて信長天文十六年ア末のつて
八月廿四日高島合戦より一信長と名に飯後と名の
ころつて當所荒廢

小出

遠江権守及京為憲の後胤と名を尉某天文十年
中位丹後守初小井屋乃名小位一小井屋氏と稱し
武田家小屬一後高井初小出と領一小出と改め
世所ふ名所一水原のつてつて其子大隅守因初仙に
乃城よりつて當所を維持

因曰舎兄且を名正重ハ尾列受知初中村小趣豊臣家小位
今の小出信濃守の先祖也ナリ

井上

當城の八皇且十六代清和天皇弟六の皇子子自統親王の

源子六孫王經基源氏と賜り、徳守府北軍棟梁と
四代源肥後守頼房の三男乙葉に子孫傳承頼房
信丹井上の郷に任り、信流源氏の首領なり。徳五信忠
田子に任り、其子三郎重文満曾郷名に任り、井上氏統
領部をとり、其後代に、信流源氏と信流守基國の高
家とあり、天文十三年丁未のころ、八月二十日、上田合戦の
初、井上元重討政満岡子息對馬守守武田家より
降し、二重井と信守守に村を義清とたふ、誠列に居り
父兄流計とあり、武田家小未す、その元來村と村と
一族あり、其後代に、上秋家小密通ふ、其義流頼
し、永海二年己未のころ、二月十日、井上對馬守と
一河綿田守持須田守武田家のたのふ、信流せられ

源氏の家系形流八

綿内

前山 春山

綿内村を東綿内と稱し、今清水村の東に舊城の跡あり
は古くあり、永平二年癸卯のころ、赤曾義仲源平流磨川
合戦に討つ、其後、前山の城とあり、合戦に後井上
と名を、満室の二重時田治守に城より入り、春山治郎
光平と稱し、其子少俊と名を、義遠城代春山より、春山
の城とあり、其後代に、信流源氏と信流守基國の高
家とあり、天文十三年丁未のころ、八月二十日、上田合
戦のころ、綿内田通治より、其後代に、信流源氏の二門武
田家小治とあり、其子も、其後代に、信流源氏の二門武
田家の源氏とあり、永海二年己未のころ、二月十日、一族頼房

せしむ

永祿二年己未二月十九日武田信玄の命ありて流代世
め流代部りて家系絶え

高梨

井上之節守源満室の四男高梨判官代蓋高より
三梨村より後継と建代し右任八永祿二年己未の
井上之族たりし信一二月十九日信玄の命ありて流代

因曰ら梨と云ふは年終ありて家あり是ら梨ハ信濃源氏井上の
末裔なり信和源氏と稱す又中野小笠原氏の子
梨村守等ハ河野家より紀氏あり本國陸奥より流代
ありハ受てあり梨より流代ありて家系絶え

牧村

須田相模守源親満の持城流長牧村守高の右任
あり永祿二年己未の二月井上家の二門流せられ
城の村須田井上流持高の族牧村より流せられ

武田源時義より武田河内管領の関とて
二百之度と経てら板東市川等洲赤坂牧村押
寄者付主従奔毛して沼澤赤崎より権部武田
惣持河の向より遠きよりと村流小青

赤巖

永祿四年辛酉の二月九月川中名合我の村小島
田村城よりありし上杉長政の右任
信信主従四人より馬場、瀬と被
并々流て人信守り信科よりありし
味とてとて世所よりありし信守り
と信播首びのありし須田門よりありし
本流より安田院地の流しと信高合我より

六月二十日中野小館の城青白少あのみ甲列誓のるあり
城丸おれよりうて浦津も高城して荒原

仙仁

永祿元年戊午のより同郡少あが城之少あ大福守武田
法住院信玄の命小依て當所小陣と築世所ありあり
居城してよりその年戊午のより月更級郡守尾の城主と尾
信守あり信玄の命小依て少あ大福守おれと政守尾
の2郎當りて地恩お賜り而も當所を引取守尾の城

大室

大室村と家の幕下大室重造殿居城天文年中
武田家小治りて子昌原信房代天文十年武田殿之
の後森武殿ちして信一同年六月織田信長と信房の後
森長一と信のあり海津城代はと蒙り守衛するの時
上杉景勝五千兵と率りて浦津と移御し
并小海津の城と大室取川中野四郡と押領し

福嶋

天正四年壬午のより六月より織田右衛門信長と父より
信房の後に秋津山大福景勝と千兵と率りて浦津と
茶臼と並ぶと禁と立海津の城代大室源信房と信
川中野四郡と押領高博と一家は浦田を以て海津
の城と上原山城守定春とて是と守りてむ日領田尾馬の之
も信房の産子と
信房の産流の後亂れし和村と家の
麾下のより上杉家の臣とす天正十二年甲申のより九月信房を
密に信田小室京守よりして信房の家と通し并海津の城代
上原山城守も上杉よりせむし浦田と同意の申付流おれあり

景勝少れり大に怒り長沼の城代治津法政等并ふ
摩瀬寺尾保科春日等とあはれ海防等の城を攻遺海
はの城と然しむ主の須田左馬大戦是時大に武蔵國
より攻めたる時族滅ん

保科

乙葉に河内守源頼季の没亂佐藤源氏の痛流保
科甚重なりて代々の右様天下に一年々来のり
二月保科源三流海馬源に別當ありし拂侍於
郡より遠の城よりしり

市川

箕作村のふもとに城ありて上杉家の持城なり代々幕下
市川源三右衛門 日本姓上杉氏郡名
ふらりて市川氏と稱す 文海之卒冬辰のり

上杉中絶に景勝被後去るより隆興合陣若松の城
のりしりの後市川源三右衛門源三右衛門子よりしり
城のりしり

以上高井郡 三十一所

更科郡

岡田

布施高の里有後村のふもと茶臼山より人皇七十四代
名相院のや向武士より後村の守りしり
茶臼山より右様と建て居りしり
布施高より後村よりしり家督よりしり其子富部よりしり

家後幸保之元年丙子の事
宗徳院所謀叛の時
仙洞伊集原守光七月つる京於平定城あり
討死し一強敵の徒

今井

康永二年冬卯子朝
北軍由曾義仲源平
能平川合戦の事なり
良黨今年西平と云平けり
若とありし古物とむこ子

廣田

村中誓し捕源氏信の幕下
廣田掃部右左衛門
康永七年廣田九月大塔合戦
討死す

横田

村中誓し捕源氏信の幕下
横田右衛門左衛門
康永七年

廣田の事
九月おき京を去ると
大文字二格の事
大塔
合戦の事あり村との藩
ありし我死信し討死

松園

村中誓し捕源氏信の幕下
千田彌盛守信頼の長
大松尾信守けり
大塔合戦討死信し討死

大塔

康永七年廣田の事
信列守後首領延四信守
善宗修理左大臣信濃守
源長秀朝長其職と守り
信光守守り大塔を築
と云し一國平均と云と能
りゆらに大文字二格の事
古怨曲歌の事なり
并村と海津井と云梨
詔訪信誓と善宗信濃源氏

の徳光の家二門の内海河とくとも少室京の押領
戒備とくとも一戦の兵とあり九月に平ら海と皆
世宗と誠と榮海西法平長玉能田たる内たる東
常盤と号し百金海とくとも極あり十月十七日唐海
討死しと南海とくとも古史今のころ柳の村を討

龍王

村より支流法住た是村入る法成村 天文二十年
西のころ八月に徳光討法成法成返すの海子島を長
治平村と名付しはく北西の住し 天文二十四年
丙午のころ 龍王村合戦の御海に北西荒廢

杵淵

富部三平家後の序置杵淵少源左重光の古居

保元政之丙子のころ 人皇七十八代崇徳院の法成の討死
討死した方より上皇 七月に平家朝とあり富部家後
討死の御り上野國の住人西七郎孫平家と家後の首と仰る
その時杵淵重光此方より首と名なりとす其後重光乃
五郎連綿とて相繼ぐ村と名を爲す 天文二十一年春の
八月重光居城の如く 我法と名を被流すありし
杵淵傳中守とあり 川中若合戦も政成の軍に敗る
永治七年甲子のころ 七月本國為末すとも富部
天文二十一年重光居城の如く 佐村と補佐人

布施

平林屋屋のまゝに長久殿康定建保七年己亥のころ
園田村小伝と榮部原伝し布施氏と稱し其子に平次

忠其の跡を承りて代々居住流村の家小属一而流大和守
頼直其子也田主膳山等方又十三年丁未の八月義清と
合戦の御武田家のたより城火して當城破却せしむ
頼直父子村の家とてこれに永流七年甲辰乃海すこと
城破の傳ふ因居して村とを補依せしむ

出浦

村上の代化村と判友代親重の次男出浦藏人蓋國とて
代々の居住村とて此のち家と稱人又文十三年丁未の八月
平甲上東京合戦の時も出浦村馬を馳馬真田洋忠
幸隆のひかりしことありし身田に居られしより出浦
村を印せしむ

真島

村上の判友大浦義國の長長と為たて付居又十三年
丁未八月丁未の島尾居城を破りて荒廢

篠之井

村上の判友大浦義國の長長と為たて付居又十三年
丁未の年島尾居城を破りて荒廢

戸部

戸部判友大浦義國の長長と為たて付居又十三年
丁未の年島尾居城を破りて荒廢

因曰出浦村とて其のち子孫を承りて居りて此の軍印ありしと相傳
へて今も浦島村と稱し之を承りて居りて與田家より海長と稱

右更科部十六所

埴科部

横尾

流野の意稱津宮内少輔時貞の長長横尾元正
元永七年唐尼のりく大塔合戦少付元

葛尾

人皇より交清和天皇の少孫元孫王孫基の長男清守
府中軍少輔清仲次子の孫元進は盛徳人変取清
同舍方の河原雅清兄弟同意して天仁三年少所正
あつて武蔵守元正の曾と少備に及びて罪よりつて
信濃國小笠原のの富所正作し其子元進盛徳人宗清代

とあり村正氏と稱し其後武蔵のりく代々長保元正
大永の氏より其威少信よりく刑部元正の曾義清
代武田信玄と國と争ひ終つて天文六年丁未のりく
武田の味方佐別佐久那相永の城を相永のりく
尉昌朝軍師山本道鬼入と密信をとりし者
尾藤長村のりく元正のりく謀八月七日上田原合戦
陣のりく田道よりつて山本道鬼のりく白河の將軍
より大のりく其のりく籍のりく冬大城のりく勢海能登
より防戦する時城のりく堀より村正のりく其のりく
流野より一連の事外れを放天よりあれり信と
息を以てせしむ願望守清のりく其のりくひと
家長殿代流野主君其清のりく其のりく討死すを

刑部左衛門尉義清主従共今人御後不春ふとありて
隆信とて入交りて川中島討ちの合戦におも

西宮

村上の幕下たる又河合やうて代居御方又十三年丁未
二月八月を所て西文方初ら河合法の子息孫伊豆
御方捕りて河合合戦より主君義清とて河合を
治りて河合を治りて河合御方とて河合を

屋代

一重山

元来春東に接するの古城一重山の城とて今も
村の東の方ありて海高尾の二孫村上治部家御方
城とて河合とて河合とて河合とて河合とて河合
村上の二門に河合とて河合とて河合とて河合と

子河合家とて河合とて河合とて河合とて河合と
此の河合とて河合とて河合とて河合とて河合と

清野

村の家祖を近の監藏人宗清が代りの御所跡家
清北河合守河合信秀入居居祐とて代り接保方文
三年丁未八月有故を河合御所跡家入居居祐と
子息とて河合守河合信秀入居居祐とて河合御所
高城の清北河合守河合信秀入居居祐とて河合御所
梅卯系とて河合守河合信秀入居居祐とて河合御所
年信秀の命とて河合守河合信秀入居居祐とて河合御所

日今河合の姓は清野の城とて河合守河合信秀入居居祐とて河合御所の城

虚空蔵山

恒神と少将との取説飛鳥の山と云ふ云文十六年丁未九月
八月村上の長長法親王の尉の末弟少将の八の成城天文
二十七年甲寅の六月九日計畧と云ふ武田家上降一日
あつたて村上兼光上降家少将通八七年元禄元年信
同日中ち少将を死に致す景政曰後上馬場景政是と致す所一高田
三八と録凡これより少将の死

妻廿山

天文十六丁未のより八月在甲村上義信高尾退去の後
頼少将と上降入石ノ識院信信云云と云ふ川中号
合戦のころより水原に年一辛未のより九月信玄退去
村上の流しと云曰今布野川中号と云ふ可候時少将より
景信と云ふ陳と稱す武田信玄と戦ふその節の武田信玄

尾飾

天飾 西飾

村上家の持城たる所の尾の城なり

曰尾飾の文字は天飾西飾等
諸にふりたり今城三の苗字を

諸畧と云ふ武田家上降一日と云ふ景信と云ふ
のより十月武田の長甲列石和毅の信人春日原吾郎景信
曰後上馬場不意に高尾と云ふ所より自ら尾飾と云ふ信玄
命より小山田信忠と云ふこれと云ふ守り川中号合戦在所
永禄七年甲子のより七月和毅の長甲列石と云ふ
高尾川掛

寺尾

之末村と云ふ清の長長と云ふ尾傳在所の尾傳信武田
家上降一日天文十六年成安の八月信玄の命より

伊予と云ふ事初伊仁城と云ふ大隅守小作南城と攻注し
幸尾の二跡大隅守小賜は所より移り右佐了ちよ
二年の二月武田家滅亡の後上杉景勝押願し
南新所印せしむ

城坂 観音寺

横尾村中と桑村との間にありて観音寺の城と云ふ
村上家代々の持城を所の日々の城あり城之定より
葛尾の二の丸同根置城とて家代交代日勤を成す
天文十六年丁未の八月村上と退去の後中絶水海七
年甲子の七月北軍光源院義輝云々一初武田
の自北和隆の二伊予とて伊予左京亮定一近江原作守
春久の自人下向の二武田信玄とて一武田一系垣科

初矢代より上守初村上と義清入道日龍寺へ領地返脚も
伊予村上氏十八年同日より古郷と領し此所より後
城を依理して右城に義清入道は元禄元年庚午
の三月より下守を云ふとて城あり村曹洞宗村上
満宗寺も集り其子周防守國清家督して父の遺
領を交所し安堵の由ひとありはるに文治四年己未の
豊后秀吉に朝鮮國に征伐の供奉台命とて家より軍兵
を命余人引率し由陣し即ち藤原玉に御して武田
の譽と云ふはくも若時南城中尚城を荒廢

因曰村上周防守國清是朝より及朝の後太閤秀吉の命より
大坂に下りては諸村より屋敷と佛に在りて是に元禄元年
乙卯の三月五日八日大坂屋敷のとき國防守國清は討死し首實
發のせり神君家康に賞しむり村家ハ由緒とて家系捨り
と云ふはくも血筋のものはありて有て陰謀するは國防の
三男村上三郎とて知方のものはありて存せしむりは當時江戸

以上埴科郡 十所

小石川等十所より千石町を編り今小村上三市と云ふ一郡にして
 小石川に列八又園を云ふ小村上の各長塚田薩摩源氏文四の
 白人の系を云ふ所より南に流石村小作一姓に氏を云ふ今小石川と
 子孫を云ふ一姓を云ふ一姓を云ふ一姓を云ふ一姓を云ふ一姓を云ふ
 備前守并上板倉内膳正重種の高長坂本郡代治とつる一長高
 宗元並小石川等近市建三也一松尾村の石牌等一益奈供と云
 奉燈等今小石川等近市建三也一松尾村の石牌等一益奈供と云
 の年正月朔日義清卒去と云ふ一是顯部一

東京林縫之助藏書

